

五味文彦著

### 『鴨長明伝』

山川出版社 二〇一三・二刊  
四六 三二〇頁 一八〇〇円

鴨長明の随筆『方丈記』は、「ゆく川の流れば絶えずして」で始まる美文と「無常」の思想で周知の書だが、二〇一一年三月の東日本大震災をきっかけに地震の恐ろしさを描いていることが改めて注目された。そして『方丈記』奥書に記される建暦二年（二二二二）の成立から八百年を迎えた二〇一二年度には、所々で記念行事等が開催されたことも記憶に新しい。

『方丈記』とその作者である鴨長明に関心が集まる近年にあつてもはや紹介も不要であろう日本中世史の大家が著した本書は、まことに時宜にかなっている。

以下に挙げる目次の通り、本書はおおむね時系列に沿った構成となっており、鴨長明とその時代について知るには格好の書である。

#### はじめに

I 若き日々 一 行く川の流れ―鴨氏人の世界／二 糸竹・花月を友とせん―若き頃／三 よどみに浮かぶうたかたは―歌人としての道／四 世の乱るる瑞相―時代の転換

II 和歌の道 五 一つの庵をむすぶ―新たな出発／六 いみじき面目―『千載集』／七 二つの姿―近代古体

III 奉公の勤め 八 歌の事により北面に参り―正治・建仁の頃／九 御所に朝夕候し―和歌所の寄人として／十 家を出で、世を背けり―大原山の雲

IV 庵から問う 十一 出家を遂げて―日野山の奥に／十二 閑居の気味―方丈の庵にて／十三 東国修行―鎌倉の世界／十四 我が心のおろかなるを励まして―『発心集』

#### おわりに

「おわりに」にも記される通り、近年の著者は和歌を史料として歴史を考えることに意欲を燃やしており、本書でも、和歌の本文を挙げてその内容や当時の状況を解説しているところが多い。本書に挙がっている和歌関係史料の数々からは、従来の古記録・古文書中心の歴史学ではとらえきれなかった世界の広がりを実感できる。

本書には、従来諸説が入り乱れていた問題についての著者の明快な見解も記されている。例えば、長明の生まれた年については、久寿二年（二二五五）説を退け、仁平三年（二二五三）説をとる（三一頁）。また長明の出家の年については、「長明が大原に逃れたのは建仁三年の春、出家は元久二年の詩歌合以降のことと考えればよい」（二〇七頁）とする。

長明自身の著作である『方丈記』『無名抄』『発心集』や同時代の古記録はもちろんのこと、和歌集や仮名日記・物語・説話集などのあらゆる史料を縦横無尽に駆使した本書によって、あたかも長明が眼前で語っているかのごとく、当該期の世相や交流のあった人物、そして和歌についての長明の考えを知ることができるの

である。

鴨長明とその時代について知りたい、あるいはより深く学びたいと思う者の関心を十分に満たす書である。

(長村祥知)